

# 新宮神社・節分祭

（追儺の式＝おにやらい）

立春前日を節分といい、この日を追儺<sup>ついな</sup> といつて、終<sup>ひらぎ</sup> に鰯<sup>いわし</sup>の頭をつけて門口にさし、煎り豆を打ち撒いて邪気災厄を祓う。この日、新宮神社では古くから節分祭・追儺の神事を執り行っています。これは、宮司ら神職が深夜<sup>あんどん</sup>に行燈の火明かりのもとで行って来ました。

この追儺の式を「おにやらい」ともいう。追儺の式は古く平安時代以前から宮中の年中行事として行われていたようだ。古代では12月晦日<sup>みそか</sup>に天皇が紫宸殿に臨御せられて、大舎人<sup>おおとねり</sup>の背の高いもの一人が方相氏<sup>ほうそうし</sup> となり



「弓矢の儀」



「豆打ちの儀」



【ついな】

黄金四目の仮面をつけ、黒衣朱裳を着て、右手に杵<sup>ほこ</sup>、左手に盾<sup>たて</sup>を持ち、後ろに王卿が続いて行く。方相氏が杵で盾を三度打つと後続の王卿等がこれに応じて桃弓<sup>よじ</sup>に鞆矢<sup>たぬや</sup>をつがえて一人の舎人の扮する疫鬼を追い払った。これに大寒疫気祓いの豆打ちが一緒になって、神社の節分祭の儀式として受け継がれている。

新宮神社・節分祭＝古式の追儺の儀では、「弓矢の儀」と「豆打ちの儀」が行われる。

「弓矢の儀」＝追儺所役2人が桃弓と3本の鞆矢を持ち、1人が本殿下縁東側から東北に向け、他の一人は同西側から、各3本の鞆矢を射て疫神（オニ）を追い祓う。漢字の鬼を「オニ」に充てているが、和語のオニとは観念が違う。

「豆打ちの儀」＝場所は弓矢と同じ場所で、まず本殿に向かい「福は内」となえて豆を打つこと2回、次に東西に「鬼は外」となへ豆を打つこと2回。今年も、伝統文化の体験学習として、あとむ幼稚園児が全員参列、神事をお手伝いしてくれます。

寒明けの季節、冬から春へ、冬眠から目覚め全てのモノが活動を開始します。ハルの陰には災禍も忍び寄ってきます。ハルへの節目（節分）に見えぬ邪気を祓い、清らかな心ですこやかなハルを迎えましょう。

現在の神事は、数年前から子どもたちの生活時間にあわせて行っています。厄除け祈願の季節です。

（追儺の式＝おにやらい 解説文は平成17年作成）

場 所＝南国市十市（十市保育所上）鎮坐

**新宮神社** 宮司・森 國 英 夫

〒783-0085 高知県南国市十市5937

電話＝088-865-5123 FAX＝088-865-5123

新宮神社HP URL=<http://www.amy.hi-ho.ne.jp/aicon-m/>

※追儺の神事に用いる「鞆の矢」の鞆が絶滅寸前です。十市に僅かに残っている所は新宮神社の齋田である「メダカふれあい公園」の一角だけです。冬を越していた越冬トンボ、何処にでもあった白いタンポポも今消えようとしています。十市の自然をみんなで守ろう。